

認定 NPO 法人パレスチナ子どものキャンペーン
海外事業チーフ 中村哲也

パレスチナのガザ地区で、2 年間待ち望んだ停戦と人質の解放がようやく合意されました。とても喜ばしいことですが、ここにたどり着くまでに出た犠牲の大きさと、避難生活を続けなければならぬ人々のことを思わざるをえません。これまでにも停戦は二度発効したものの一回目は 1 か月ほど、二回目も 2 か月で戦闘が再開された経験があるので、まだ安心はできません。

激しい空爆と地上侵攻によって、これまで確認できているだけで 67,900 人以上が亡くなりました。子どもの死者は 2 万人を超えます。住宅の 9 割以上が破壊を受けて町はがれきとなり、テントや簡易的な避難所での生活が続きます。しかも、ガザ全体の 58% は軍事占領されたままで帰還すらできません。冷たい雨が降る冬（パレスチナでは 10 月後半～4 月前半が雨季）をどうやって越すのか、大きな課題です。

飢きんに至るほどの飢餓を生み出している「封鎖」も変わりません。ガザに入れることのできる物資は、種類も量も非常に制限されています。食料、医薬品、生活用品、燃料、建築資材、様々なものが足りない状況が続いています。電気や水道といったインフラもない中で、住民 200 万人が生活を立て直していくことは容易ではないです。

停戦が実際にどのようになっていくのかは不透明ですが、ガザの人々の苦難がまだまだ続していくことは確かだと言えます。

子どもたちも長く飢えや恐怖の中に置かれてきました。学校も破壊され、学校教育も失われたままです。そして、100 万人以上が心のケアを必要としていると言われています。子どもたちが口を開くと、こんな言葉が出てきます。

「死んだお父さんやお母さんに帰ってきてほしい」

「なくなった手がもどってほしい」

「食べ物がほしい。すごくお腹がすいた」

「（自分から）ひどいにおいがする。きれいになりたい」と。

子どもたちから話を聞いた現地スタッフは「子どもたちが抱えているものを想像できますか」と私たちに投げかけました。子どもたちの心身に落とされた深刻な影に向き合っていかなくてはなりません。

パルシステム東京「平和カンパ」を通じて、ガザ南部の貧困地域にある「ナワール児童館」の運営を長年にわたって支えていただきました。子どもを主体とした地域密着型の児童館活動は住民たちから高く評価され、小学生と母親たちの居場所となり、多くの子どもたちの成長を支えました。

2023 年 10 月の戦争開始直後、児童館は避難所として機能していましたが、戦火が拡大する中で残念ながら破壊されました。その後、児童館の母団体と一緒に南部地域での緊急

支援や子ども支援を展開しています。児童館での蓄積が緊急支援活動の土台になっています。紙と鉛筆をかき集めて寺子屋を開き、戦火の中でも教育をあきらめませんでした。また、少しでも楽しい時間が持てるような子どもの居場所を避難所を作りました。子どもたちの心や学習のサポートは「平和カンパ」の力を借りしながら、これからも注力していくかなければならないと考えています。

この 2 年間、ガザの中にいるパレスチナ人のスタッフたちは、自らが避難者となり、家族を支えながら、あるいは家族を失いながらも、懸命に支援活動を続け、情報を発信してきました。枯渇していく食材と薪をかき集めながら炊き出しを行い、必死に確保した燃料で給水車を避難所に走らせ、がれきの中から医療機材を引っ張り出してクリニックを再開させ、テントで作った寺子屋に子どもたちを招きました。今も変わらずに奔走してくれています。その働きに私たちスタッフ一同も応えていきたいと思っています。

ガザの子どもたちに向けて、非常に多くの温かいご支援をいただいたことに心より感謝申し上げます。引き続き寄り添っていただけると嬉しく思います。